

研究分野の魅力・将来性

現代は国際と国内の境界が明確には分けられない時代になっています。日本もアメリカをはじめとする諸外国と多くの交渉をして物事を決めていますし、地球温暖化や紛争予防など世界的な問題にはグローバルな取り組みが欠かせません。政治に関する学問もこれまでは、国内は「政治学」、国際は「国際関係論（国際政治学）」といった分業体制が敷かれてきましたが、新しく学際的な取り組みが必要になってきています。

EU研究は、国際と国内が一体化したEUという地域統合を研究対象とする学問です。EUでは新しいことがどんどん取り組まれ、また研究もものすごいスピードで進んでいます。国境などのさまざまな境界をわたしたちは自明のものと考えてしまいがちですが、新たな可能性を見せてくれるのがEU研究の最大の魅力です。

日本を含めたアジア地域でも、地域統合の可能性が議論されています。EUは50年以上の歳月をかけて現在の形になったわけですから、アジアの地域統合がすぐにEUのようになるとは思えません。しかし、EUの経験はアジアの地域統合を考える上で重大な示唆を与えてくれるでしょう。

おそらく今もっとも重要な問題は、地域統合の中心に「個人」や「人々」がいるかどうかです。日本も含め、現在の政治は残念ながら経済的な力の強いもののための政治になってしまっています。EUではネオリベリズムのための地域統合へ進んでいるのではないかと、という懸念もたれています。そこで国家や企業ではなく、人々がより積極的に、直接的に政治参加できるようにする模索がされています。経済的利益や企業のための地域統合ではなく、人々が政治を取り戻すことができるかどうか、地域統合が意義のあるものになるかどうかを決めると思います。



■政治学 ■政治制度論
■国際関係論

土谷 岳史
(つちや たけし)

早稲田大学大学院政治学研究所博士後期課程単位取得退学。
2009年4月より経済学部講師。専門はEU（欧州連合）の政治。
趣味は音楽鑑賞（激しい音楽が好き）やサブカル批評を読むこと。

推薦図書

- ① 立岩信也『弱くある自由へ』青土社
研究者になるつもりなどなかったのですが、この本を読んでものすごい衝撃を受けました。自分は本当ににも考えていなかったんだな、ということを知られました。
- ② 中村健吾『欧州統合と近代国家の変容』昭和堂
EUについて書かれた本は非常に多くあるのですが、この本は大きな視野から書かれた知的刺激に富む本です。またEUの危険性についても触れています。
- ③ 米本昌平ほか編『優生学と人間社会』講談社現代新書
脳死臓器移植法が改正され、移植医療がさらに進められようとしていますが、残念ながら国会やメディアの議論は極めて不十分なものでした。現在でも人の生をその価値によって選別する優生学は生きています。冷静に考える端緒となる1冊です。